

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：32710

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370242

研究課題名(和文) 日本近代文学館他における川端康成・肉筆資料の調査研究

研究課題名(英文) Research on Yasunari Kawabata's own handwriting materials in the Museum of Modern Japanese Literature and elsewhere

研究代表者

片山 倫太郎 (KATAYAMA, Rintaro)

鶴見大学・文学部・教授

研究者番号：90253012

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本近代文学館、茨木市立川端康成文学館をはじめ、全国の施設に収蔵されている川端康成の原稿や書簡等を調査研究するものである。こうした施設に収蔵されている川端康成の一次資料については、これまでその全体が把握され、個々に調査研究されることはなかった。原稿からは作品の生成過程が知られ、書簡からは文壇内の細かな動向が知られる。これらを翻刻し、データベース化したことにより、本研究は川端文学研究のみならず、日本近代文学研究に資するものである。

研究成果の概要(英文)：This research investigates Yasunari Kawabata's manuscripts, letters, and other things that belong in the Museum of Modern Japanese Literature, Ibaraki Municipal Yasunari Kawabata Literary Museum, and other facilities in Japan. So far these Yasunari Kawabata's primary sources in these facilities have never been grasped as a whole, and have never been studied individually. From his manuscripts we can know the production process of his works, and from his letters we can know the detailed trend in the literary world at that time. We put them in type and made the database. As a consequence, our research can contribute not only to Yasunari Kawabata's literary studies but also to modern Japanese literary studies.

研究分野：日本近代文学

キーワード：川端康成 日本近代文学館 文学館 文献学 原稿 草稿 書簡 日本近代文学

1. 研究開始当初の背景

近代文学者の原稿、書簡等は、全国の文学館、図書館その他の施設に寄贈や購入のかたちで収蔵されているが、こうした一次資料を研究者が詳細にわたって調査した例は、いまだわずかであり、川端康成に関してはほとんど手つかずの状態であった。たとえば定本とされている『川端康成全集』(全37巻、新潮社)の校訂であるが、初出にまで立ち返った例は少なく、原稿を参照している例もほとんどないことが、巻末の「解題」からは知られる。すべての異本の校異を記した例もない。

また、川端康成の原稿、書簡等は全国に散逸しているが、これらのほとんどは全集に収録されておらず、研究者が目を通した形跡すらなく、目録も整備されていない状態であった。

それゆえ、各施設が所蔵する資料の具体的なありようを調査し、把握するという、もっとも基礎的な作業から開始する必要性があった。

2. 研究の目的

研究者が現在調査可能な川端康成の一次資料は、主に日本近代文学館、茨木市立川端康成文学館などに収蔵されている。

日本近代文学館には生前の寄贈をはじめ、死後も川端康成記念会から寄託された資料が多数収蔵されている。「川端康成文庫」に2,500点あまり、他に「川端康成コレクション」に原稿、書簡等が多数あるのだが、目録はいまだ刊行されていない。

茨木市立川端康成文学館における収蔵目録は一般に公開されていないが、直接問い合わせたところ、自筆資料(原稿、書簡)130点あまりのリストをいただいた。

その他川端康成ゆかりの地には、一般には非公開の「特別資料」として、原稿、書簡、揮毫などが収蔵されている。そうした施設にも可能な限り出向き、一次資料を実地検分し、データベース化して調査研究をおこなうことが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

事前に各施設との綿密な打合せをおこない、調査の許諾、所蔵資料の概要の把握を済ませた上で、研究分担者4名、および、研究協力者である川端康成学会所属の大学院生(当時)3名(杵淵由香、佐藤翔哉、堀内京)をとめない、資料の収集と調査をおこなった。研究代表者と分担者は必ず複数名が同行し、正確な資料収集を期した。

写真撮影の許可されたものは全て撮影し、許可されないものはその場で書き写す等の作業をおこなった。

各資料は1点ずつ検分し、原稿については枚数、範囲、用紙の版元と大きさ、インク、抹消跡、書き込み、組版作業の痕跡等をすべて記録した。書簡については、翻刻をおこない(すでに翻刻されているものについては確

認をおこない)、枚数、用紙の種類と大きさ、インク、墨書きの様子などを記録した。それらはすべて、データベース化した。こうした作業によって、たとえば使用された原稿紙やインク等のデータベース作成も可能となる。

4. 研究成果

各地の文学館、収蔵施設で調査をおこなったものは、以下の通りである。なお、個々の翻刻等については、著作権の関係上、現時点では詳細を公表することは差し控えることとする。川端康成記念会・川端香男里会長に個別に許可をいただいた後、順次公表することになると考えている。加えて、日本近代文学館他の各施設の許可も同様に必要であると考えている。

(1) 日本近代文学館

前述のように、日本近代文学館には川端康成に関する資料がおよそ2,500点存在する。事前に館の責任者、職員の方々と協議し、リストをいただいた上で、調査対象の選定をおこなった。日本近代文学館では、主に原稿について調査をおこなった。書簡類はすでに館によって翻刻されており、また、蔵書については成田分館に収蔵されているため、書込等の調査は時間の都合上見送ることにした。以下の原稿を中心に調査研究をおこなった。

『禽獣』の原稿調査をおこない、抹消跡、書き込み、組版作業の痕跡等をすべて活字に翻刻をした。その過程で極めて重要とみなされる改稿箇所が発見され、執筆当初の構想とは異なる出来上がりになっていることが、具体的に明らかになった。その成果の詳細は、片山倫太郎「川端康成」(日本近代文学館編『近代文学 草稿・原稿研究事典』八木書店)として発表した。

また、初出以後の作者による改稿の過程を追うため、初刊以来の所収単行本も遺漏なく調査した。改稿過程の調査は、作家の自作への姿勢だけでなく、当時の出版の事情、たとえば伏字などの有無を通して、検閲の問題も明らかにできた。この成果は、片山倫太郎「『禽獣』における改稿と系統」として学会発表し、その後論文として刊行した。

『山の音』については、館所蔵の原稿(全3章分)をすべて点検し、改稿痕その他をすべて模写する作業をおこなった。多種多様な改稿痕からは、完成稿に至るまでの作者川端の思索の軌跡を知ることができた。以下に述べる茨木市立川端康成文学館所蔵の原稿と併せると多くの部分の原稿が再現されることとなった。

(2) 茨木市立川端康成文学館

同館が所蔵する、原稿17点、書簡68点、葉書42点の全てを検分し、写真撮影等により資料収集をおこない、データベース化した。

原稿の中には『山の音』(36枚)、『水晶幻想』(36枚)、『篝火』(35枚)、『歌劇学校』

(20 枚)などの重要な作品がある。他に、『星を盗んだ父』(22 枚)、『横光君の未発表作品について』(8 枚)、『哀愁』(18 枚)、『愛子抄』(8 枚)なども注目される原稿である。これらについての考察は現在継続しておこなっている。成果の一部は、たとえば、山田吉郎が「康成と虚子についての一考察 「わが愛する文章 愛子抄」を視点として」と題して論文発表し、その後、同氏は「川端康成と高浜虚子 『愛子抄』 を中心に」として、同文学館にて講演した。

書簡、葉書については翻刻をおこない、すでに同館にて翻刻済みのものについては点検と確認をおこなった。

私事に関する書簡は川端康成の生活の動向を知る上で重要であり、知られていない交友関係を含めて、年譜の遺漏を補うことのできるものが多数認められた。

文学者や出版社などに宛てた書簡には、今まで知られていなかった文壇の事情や交友関係を明らかにするものが多数認められた。横光利一、菅忠雄、志賀直哉、久米正雄、瀧井孝作、牛島春子、石塚喜久三などに宛てた書簡は、そうした文壇事情の一端を明らかにするものである。石塚喜久三宛書簡は、後述の北海道立文学館所蔵の書簡と併せて、石塚の芥川賞受賞経緯などを明らかにする資料として貴重である。そうした中でも、戦時期に横光利一、「文学界」に宛てた 2 通の書簡は特に重要である。ここには昭和 10 年における雑誌「文学界」の内部事情や、文芸懇話会への参加をめぐる川端、横光、小林秀雄などの動静が詳細に記されており、戦時期の文壇内部の人間関係等を知ることのできる貴重な資料である。その内容については、福田淳子が『『茨木市立川端康成文学館』収蔵資料について』として学会発表し、その後、福田淳子・杵淵由香・堀内京・佐藤翔哉「川端康成文学館 未発表書簡二通（横光利一宛、文学界宛）をめぐる」として論文発表された。

茨木市立川端康成文学館における資料調査の成果の公表については、館長ほか職員の方々と数度にわたり、協議をおこなった。その結果、市と文学館の積極的な協力を得ることができた。なお、川端康成学会第 40 回大会が茨木市教育委員会との共催のもとで開催され、田村充正が「川端康成『美しさと哀しみと』小説と映画のあいだ」と題して研究発表し、また、同文学館の協力の下、茨木市、京都市の現地踏査をおこなった。

(3)伊豆市湯ヶ島温泉湯本館ほか

湯ヶ島温泉湯本館は、川端康成が若き日におよそ 700 日にわたって滞在した旅館で、『伊豆の踊子』ほか多数の作品を執筆した宿として有名である。川端康成とは生涯にわたって交流があり、ゆかりの品々が多数所蔵されている。しかし、これまで研究者によってそれ

らが調査されたことはなく、したがって、これらの調査とともに、宿に伝わる情報等を遺漏なく収集することにした。

収蔵品の中でとくに重要なのは、『千羽鶴』中の「絵志野」の章の原稿 30 枚あまりである。晩年の川端が直接湯本館に寄贈したものである。現在、抹消痕等の調査を継続しておこなっている。

湯本館の社長からは、湯ヶ島と湯本館にまつわる様々な情報をいただき、その成果は、伊豆市教育委員会と共催した川端康成学会第 43 回大会で片山倫太郎が発表し、まもなく(2017 年 6 月末日)、片山倫太郎「インタビュー『川端康成と湯ヶ島』土屋晃氏(湯本館取締役社長)」として論文発表されることになっている。

さらに、湯本館を詳しく実地調査する過程で、川端康成の中学時代の後輩・小笠原義人が大本教を介して湯本館とつながり、『伊豆の踊子』の制作にも少なからず影響していたことが明らかとなった。小笠原家の修行所があった京都奥嵯峨での実地踏査もふまえて、その成果は、片山倫太郎「川端康成における官能と宗教の原点と再帰 草稿『湯ヶ島での思ひ出』を中心に」として、2017 年 8 月に論文発表される。

『伊豆の踊子』の舞台となった河津町の湯ヶ野温泉福田家の主人は、晩年の川端の秘書を務めていたこともあり、ここにもゆかりの品が多く所蔵されていた。それらの調査とともに、晩年の川端康成について聞き取りをおこなった。

(4)北海道立文学館ほか

本調査研究の過程で、北海道立文学館に川端康成の未発表書簡が 10 点あることが判明し、調査を実行した。森田たま、石塚喜久三、石森延男などの作家に宛てた書簡が発見されたが、とくに 5 枚にわたる石塚喜久三宛書簡は、大陸で蒙疆文芸懇話会などを開催し、後に芥川賞を受賞した石塚と川端との親密な交流を推察させるものであり、大陸植民地文学の新資料としての価値は高いと考えられる。北海道立文学館の協力のもと、すべて写真撮影をし、現在、翻刻と調査研究をおこなっている。

また、川端康成の北海道における足跡は、これまで注目されなかったが、新味のある事実の収集ができたため、これらについては後日発表する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 17 件)

片山倫太郎、川端康成における官能と宗教の原点と再帰 草稿「湯ヶ島での思ひ出」を中心に、国語と国文学、査読有、Vol.94、No.9、2017、印刷中

片山倫太郎、インタビュー「川端康成と湯ヶ島」土屋晃氏(湯本館取締役社長)、川端文学への視界、査読無、Vol.32、2017、印刷中

田村嘉勝、川端康成「九十九里」論、芸術至上主義文芸、査読有、Vol.43、2017、印刷中

田村充正、二つの「伊豆の踊子」小説と映画のあいだ、翻訳の文化/文化の翻訳、査読無、Vol.12、2017、pp.1 - 14

福田淳子、「本因坊名人引退碁観戦記」から小説『名人』へ、川端康成と戦時下における新聞のメディア戦略、学苑(人間社会学部紀要)、査読無、Vol.904、2016、pp.57 - 67

山田吉郎、康成と虚子についての一考察「わが愛する文章 愛子抄」を視点として、鶴見大学紀要第1部日本語・日本文学篇、査読無、Vol.53、2016、pp.87 - 112

田村嘉勝、川端康成と温泉文学「伊豆の踊子」「温泉宿」「雪国」をもとに、芸術至上主義文芸、査読有、Vol.41、pp.84 - 91

福田淳子・杵淵由香・堀内京・佐藤翔哉、川端康成文学館 未発表書簡二通(横光利一宛、文学界宛)をめぐって、川端文学への視界、査読有、Vol.30、2015、pp.8 - 23

田村充正、川端康成「美しさと哀しみと」小説と映画のあいだ、川端文学への視界、査読有、Vol.29、2014、pp.6 - 30、

〔学会発表〕(計 6件)

山田吉郎、川端康成と高浜虚子『愛子抄』を中心に、平成28年度川端康成文学館文学講座(招待講演)、2016年10月12日、茨木市立川端康成文学館併設上十条青少年センター(大阪府茨木市)

片山倫太郎、インタビュー「川端康成と湯ヶ島」土屋晃氏(湯本館取締役社長)、川端康成学会第43回大会(招待講演)、2016年06月18日、伊豆市天城保健福祉センター(静岡県伊豆市)

田村充正、川端康成「山の音」と小津安二郎監督『晩春』の詩学の中の日本、川端康成展(パリ・フランス)(招待講演)、2014年9月18日、パリディドロ大学(パリ・フランス)

片山倫太郎、「禽獣」における改稿と系統、川端康成学会第41回大会、2014年06月22日、二松学舎大学(東京都千代田区)

福田淳子、「茨木市立川端康成文学館」収蔵資料について、川端康成学会第41回大会、2014年06月22日、二松学舎大学(東京都千代田区)

田村充正、川端康成『美しさと哀しみと』小説と映画のあいだ、川端康成学会

第40回大会、2013年8月25日、茨木市男女共生センターWAMホール(大阪府茨木市)

〔図書〕(計 2件)

片山倫太郎、「川端康成」(日本近代文学館編/編集委員:安藤宏・栗原敦・紅野謙介・十重田裕一・中島国彦・宗像和重)、八木書店、近代文学 草稿・原稿研究事典、2015、pp.181 - 185

片山倫太郎、川端康成「禽獣」における改稿と系統、鶴見大学日本文学会編、笠間書店、『国文学叢録 論考と資料』、2014、pp.169-191

6. 研究組織

(1) 研究代表者

片山 倫太郎 (KATAYAMA Rintaro)
鶴見大学・文学部・教授
研究者番号: 90253012

(2) 研究分担者

田村 充正 (TAMURA Mitsumasa)
静岡大学・人文社会学部・教授
研究者番号: 30262786

田村 嘉勝 (TAMURA Yoshikatu)
尚絅学院大学・総合人間学部・教授
研究者番号: 50306081

福田 淳子 (FUKUDA Junko)
昭和女子大学・人間社会学部・准教授
研究者番号: 70218923

山田 吉郎 (YAMADA Yoshiro)
鶴見大学短期大学部・保育科・教授
研究者番号: 80137687

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

杵淵 由香 (KINEBUCHI Yuka)

佐藤 翔哉 (SATO Shoya)

堀内 京 (KORIUCHI Miyako)